

1. 多目的に利用される水路

琵琶湖疏水は、琵琶湖の水を物資の運搬や農業用水、水力発電など、多目的に利用するため、大津・三保ヶ崎から京都・蹴上の間に建設された水路です。

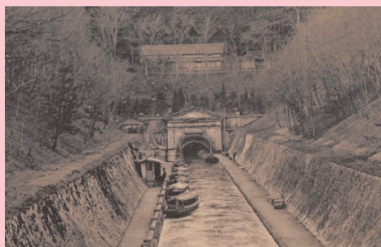
計画を実現させたのは京都府知事の北垣国道で、大学を卒業したばかりの田邊朗郎を工事責任者にあてました。第一疏水の工事は1885(明治18)年に着工し、1890(明治23)年に完成しました。

発電については、当初は水車を動力として利用する予定でしたが、田辺のアメリカ視察によって発電に計画変更し、1891(明治24)年に日本初の水力発電所として蹴上発電所が運転を開始しました。

その後、電力や水道などの需要から、1912(明治45)年には、全線が地下トンネルの第二疏水が完成しました。

2. 桜と疏水通船

疏水の琵琶湖の取水口から続く桜



写真T-2 昭和初期の第一隧道の様子
(絵葉書から)

は、疏水の開削時に植え始められたもので、開花時には三井寺(園城寺)山内の桜とあいまって、観桜の名所として知られています。

また、1996(平成8)年に国史跡に指定され、2020(令和2)年に日本遺産に認定された琵琶湖疏水には、明治中期の日本の土木技術が感じられるポイントが、あちこちに残されています。

琵琶湖疏水の機能のうち、人や荷物を運ぶ舟運の役割は、交通の変化によって1951(昭和26)年に一旦途絶えますが、現在は観光航路として疏水の通船が復活し、再び疏水に船が行きかうようになりました。



写真T-1 明治期の疏水(手彩色写真)(大津市歴史博物館蔵)

大津市歴史博物館 木津 勝